

7/7~9、北海道洞爺湖サミットが開かれました。
世界の首脳が集結したこの国際会議で、環境問題解決のため、何が決まったのでしょうか？

Q1
今回のサミットの意義は？

今回のサミットには、さまざまな議題がありました。食糧や原油の高騰、世界経済の混乱……。しかし「環境サミット」と呼ばれたように、最大のポイントは、やはり気候変動問題。この地球規模の課題に対して、サミットでどんな活路を見いだせるのか、世界中が注目していました。

昨年ドイツで開かれたハイリゲンダム・サミットで、日本は「クールアース50」で提案している「2050年までに世界全体の温室効果ガス排出量を半減する」という目標の共有を目指して交渉し、各国首脳は「真剣に検討する」ことで合意しました。ここからさらに一歩踏み込めるかどうか、今回のサミットにおける日本の「腕のみせどころ」でした。

Q2
結果はどうだったの？

サミット2日目の8日、主要8カ国(G8)は話し合いの結果、発表された首脳宣言の中で、「2050年までに世界全体の排出量の少なくとも50%の削減を達成する目標というビジョンを、国連気候変動枠組条約の全締約国と共有し、同条約の下での交渉でその目標を検討、採択を求め」と明記しました。前回の「真剣に検討」から一歩踏み込み、「半減」を実現するため、G8が結束していくことが合意されたのです。また、G8各国が「野心的な中期の国別総量目標を実施すること」も合意されました。今後、半減を本当に実現するためには、「共通に有しているが差異のある責任及び各国の能力」の原則に沿って、世界全体での対応、特に経済成長を続ける中国やインドといった新興国を含むすべての主要経済国の貢献が必要です。

Q3
主要経済国とはどんな話し合いがされたの？

今回、3日目には「主要経済国首脳会合(MEM)」という会議が開かれました。MEMとは、「Major Economies Meeting」の略。サミット正式メンバーのG8に加えて、オーストラリア、ブラジル、中国、インド、インドネシア、韓国、メキシコ、南アフリカの主要経済国8カ国が参加しました。元々アメリカが提唱した集まりで、昨年9月に事務レベルでの初会合が開かれています。これら主要経済国の幅広い課題にわたって、気候変動のことは史上初めてのことです。

会議の前日には、ブラジル、中国、インド、メキシコ、南アフリカによる会合が行われ、先進国が温室効果ガス排出量の削減の達成をリードすることが必須であること等を内容とする政治宣言が採択されるなど、G8各国との間には意見の隔たりがありました。しかし、MEM首脳宣言では「世界全体での長期目標の共有を支持する」と明記されました。G8首脳宣言を肯定的に受け止めた内容と言ってよいでしょう。また、G8以外の主要経済国が、温室効果ガス排出に関して「適切な緩和の行動を遂行する」として、中国やインドといった新興国も、今後、中長期的に抑制に取り組む方針を打ち出しました。来年イタリアで開かれるサミットでも同様の首脳会合が開かれることも決まりました。



イラストレーション/タニダリョー

Q4
サミット以後はどんな話し合いが行われるの？

先進国に温室効果ガス削減を求める、京都議定書の第一約束期間は、2012年で終了します。2013年以降の「ポスト京都」の次期枠組は、2009年にコペンハーゲンで開かれるCOP15(国連気候変動枠組条約第15回締約国会議)で合意されることとなっています。今年12月には、その「前哨戦」ともいえるCOP14がポーランドで開かれます。福田総理は最終日の議長会見で、今回のサミットでの話し合いの成果が、「国連での交渉に弾みをつけるという貢献ができたと思っている」と述べています。「2050年に半減」を現実のものとするため、今後も粘り強い国際交渉が展開されていくことになるのです。

